

早起きした冬の日、大股で歩く妻の足元には霜柱がたっていた。薄明の森に妻の頬が紅くほんのり染まる。旭日が山裾から仔馬のように野を走ってくる。折々の木々の間を抜けてやがて妻と私の間を切るように貫き走ってやがて見えなくなるほど遠くにいつてしまう。妻は何も語らず目の前の森の坂道を登っていく。妻の足取りは例の思案のお陰でじつくりと重かった。睫毛は長く瞼から落ちていく。夜間腫に貯えられた泪が潤いを見せて睫毛を伝って地面に落ちるかのようだった。妻とは連れ立って十余年になる。一体何故私たちは出会ってから十余年の歳月を例のことに苛まれてこうして毎朝焚火をせねばならないのだろうか。何百と繰り返した間に坂道の途中ではたと呼びとめられ、星夫の足取りもやはりじつくりと重かった。ぎゃーと獣の聲が森に響いたとき、カケスに違いないと星夫は思った。思うが否や、そうした鳥の声を幼少の頃より聞きなれて、今日まで育ち、鳥の名前まで言える自分に忌んだ。懐かしきものが恥ずべき場所より生まれているような風がそっと星夫の気持ちになびいた。霜柱を踏みながらクヌギの木々をわけ入り、焚火場所までやってきた。山の朝には神秘的な静けさが宿る。焚火場所は木々が周りを囲むように広場となっていた。旭日がじわじわと土を温める。朝露に濡れた葉に照り返され、旭日がこの広場に乱反射する。魂がその広場を支配しているのか。火の爆ぜる音が鳴った。妻の用意した新聞紙が燃え広がり、枯れ草や枝にまで火がしみ込んで、勢いよく焰が上がった。はじめりの火。精霊たちの火。星夫は宗教を信じない代わりに神話が好きだった。古来神様は日常のあらゆるところにいらっしやることを祖父より聞いて、火にも敬いの心を持たないとなと思いつつ、冬の空を見上げていたので、焰の上がる瞬間は見られなかった。火は弾み、枝々の隙間を通り抜けて存在を大きくしようとする。瞳を焼かれるような熱さが焚火から伝わり、思わず唾を呑んだ。

ステレオにレコードを入れてながす。静かに重いメロデイが朝の居間に聞こえる。和室にもクラシックの音は馴染んだ。妻は朝食の支度をする。膳に卵が一つおとされて、納豆が添えられる。味噌汁の鍋がぐつぐつと茹る。飯を炊く鍋から湯気が漏れ出して、ホウレンソウを切る音が俎板の上に響く。叔母も寢床から起きてきた。叔母は良く眠れたように溼潤とした顔を見せる。ステレオの上には叔母の集めているカントリーの歌手たちのアルバムが並ぶ。埃っぽいステレオの上にある『亡き王女のためのパヴェーヌ』は妻が好きで、叔母には星夫自身が好きで聴いていると弁明したが、星夫にクラシックは判らなかった。焚火の後、妻がこれを聴きたいのではないだろうかという一曲をながしながら食卓を丁寧に拭くことが星夫は自分の仕事だと思っている。何度か『Pavane pour une infante défunte』を再生する。妻が食卓に戻ってくるまで、叔母と二人きりになるのが苦痛だった。沈黙を和らげるためにも音楽は有効だった。

叔母は実に事務的に妻の作った食事を食べる。仕事のように、好きで食べているのでは

ないと表明するように。妻と星夫はそれをできるだけ見ないようにする。

星夫には父と母はいなかった。

星夫はまだ歯も生えぬ時分から、叔母に「金など借りるものではない」と諭されてきた。叔母の名は稔子と言った。余所の家の子供の服が汚れていただけで、家にあげず「用事があるのさきょうは無理だ」と言い、そっと耳で囁きながら、「あの子とは遊んではならない」と厳しいというよりは歪んだ教育のもと、星夫に接してきた。星夫は大学で学んでからというもののこの生まれ故郷が稔子との思い出の中にしかなく、忌むべきものとして認識していた。稔子は星夫を全力で育てようとしてきた。そのことは星夫自信が良く判っていたが、金のことが頭から離れない稔子のことをひそかに軽蔑していた。ある日、

「世間には、死ぬまで後悔するような額の金を借りる人間が幾人いるだろうね」

と稔子が尋ねても「知りませんよ」と冷たく返すことがほとんどだった。

朝食後洗いものを終えた妻は、せつせと雪かきにでかける。妻がいつのまにか黙ってでかけてしまうので、星夫はいつも後から雪かきの現場にやってくるようになった。妻は黙って手を動かした。放り上げられた雪は、雪の上に落ちて門扉から土の地面が広がっていく。手袋もせずにでてきたので、霜焼けを起こしそうになりながら私も雪をどかす。一晩のうちに寒さに固まって重たい物体となった雪は男の手でもあまりあるものだったのに、妻はせつせと雪をどかす手を止めない。

稔子はよく昔の話をした。祖父が生きていたころの話を如何に祖父が駄目な人間だったかを飽きもせず、話していた。

祖父は星夫にとって忘れ難い人であった。父と母のいない星夫にとって、家族は祖父と叔母しかおらず叔母には近寄り難さを小さなころから感じていたので星夫の話相手といえど専ら祖父であった。祖父は物知りで幼いころ星夫は大抵のことは祖父に聞けば判るので祖父を尊敬していた。祖父は毎朝起きると星夫を連れて、山道を登り焚火場所に行き、火を燃した。そこで星夫は祖父から古事記に出てくる火の神カグツチの伝説を聞いた。カグツチはイザナミの子として生まれたが、生まれる時にイザナミの陰部を焼き焦がしてしまいそれにより、イザナミは死んでしまう。これに怒ったイザナギがカグツチを殺す。これだけの話を星夫は何度も祖父から聞いた。祖父が話をしてくれないときはカグツチの話をしてくれと乞うた。火を見る度にカグツチのことを想像して、星夫は胸が痛くなった。

祖父が生きているうちは、あいつは自分のことを殺しに来ないだろうと星夫は確信していた。祖父が亡くなってからも遠くからあいつがこの家の焚火が上がるのを見ている気がして、焚火を絶やすことはしなかった。カグツチのようにして生まれた自分をあいつは物凄く憎んでいるはずだ。叔母も信じることができない。妻は一緒になって火を起こしてくれる。焚火の絶えたこの家を父は釜でも猟銃でも持ってきて自分を殺すに違いない。しかし、ここには祖父の墓がある。この墓を守るものがある。叔母は祖父のことを軽んじ、墓などは歯牙にもかけていない。

祖父の墓は一文字型と呼ばれ、墓石が真四角に切られており、丸みは見られない。この

墓を星夫は気に入っていた。祖父は、頑固であったが気持のよい男だった。祖父といえる時が叔母の持つ一族の因縁から解放されて、目の前の小さな火について話ができる解放された時間だったと言ってよい。金の話を幼い頃より聞き、うんざりしていた星夫にとって祖父の話す火の神話には興味がつきなかつた。

星夫がまだ少年のある日、星夫は山道を一人で歩きながら、ふっと誰かの声を聞いた気がした。「じい様は達者か」その声の正体は掴めず、星夫は恐くなって山道を駆け下りて行った。

次の日に星夫は熊のような体躯の猟師が道端であぐらをかいているのを見た。自分はそろばん稽古に通う途中であつたので、山道で人と出会うこと自体が珍しかったのであるが、何も声をかけずにすたすたと通り過ぎようとした。待て、というように猟師が星夫の足の根っこをとらまえて抑える。そのとき星夫は昨日、俺に向かって「じい様は達者か」と問いかけたのはこいつに違いないと判じた。猟師の持ちものから鈴の音が聞える。ちりんちりん鈴の音が鳴るのと同時に、猟師は顔をぬつと近付けてくる。

星夫は足を力任せにほどき、一目散にそろばんの稽古に逃げて行った。

また次の日、家に帰ってくると台所で物音がするので狸が悪さをしているのかと思ひ、覗きに行くと例の熊の男がしゃもじで鍋ごと飯をすくい食らっているのを見た。星夫は思はず小便を漏らした。熊の男はこんどは星夫にまるで気付かないように別の鍋に叔母がこさえてあつた芋の味噌汁をずると飲んでいゝ。沢庵も切らずに丸かぶりをして、ぱりぱりと音をたてている。野獣そのものの眼をした男に声をかけることすらできない星夫の後ろから祖父が現れて火鉢の研ぎ棒をつきたてて、「今すぐに去れ」と凄しい見幕のたまつた。熊の男はにやりと笑いしゃもじや玉を置き、すぐごと家の中から玄関に向かう。台所の入口で星夫とすれ違った時に、「……」と言つた。星夫はもうその言葉を覚えていないのだがこの男はやがてこの家を奪いにまたやってくるのかもしれないと怯えて、しようがなかつた。

毎朝、凍るような冷氣の中二人は一所懸命に火を起こして煙を上げようとする。煙は天をのぼり空に消えていく。そのことをもつて祖父が生きている嘘の証明であることを妻も知っている。一体、齢幾つのお前はお前は恐れをなしているのか、妻はそう考えているだろうか。父が生きているのか、死んでいるのかすら判らぬ中で妻と呪われた生活をしているという実感だけが星夫を襲う。ぎゃーとカケスがまた鳴く。結局妻と火を囲みながら何をするとともに二人は黙つたままだ。やがて枯れ枝がつきて灰を掃除することが済めば、二人はせつせと山を降りていく。厚い大きな雲に覆われた旭日が雲間に入り、その瞬間一気に日の光が山裾から山頂にあがつていく。神々しいものがその山に降り立つように、明明と日の光に山が焼かれて朝が始まるのが二人にとつての現実だった。その現実としての朝を迎える度にどつと疲れが来るような顔を見せるのだ。

妻が夕暮れだというのに電灯もつけずに部屋にいて、背中を向けて座っているのをみつけた。「何をしているんだい」と尋ねても何の色よい返事が返ってくることもなく、ただ、うんとかすんとかを言うばかりだ。妻が虚無の中にいることは明白だった。星夫は妻がこの先遠くにいつてしまうような気がして何だか寒くなった。

妻の肩にかかった長い髪を櫛で梳く。妻は振り向きもせず肩に闇を残したまま、暗い部屋と共にある。そのうちに星夫は妻の肩を床にたおす。妻は物のようにぐったりと抵抗もせずになだれていく。物のような妻にも体温は残っていて、むき出しの肩のあたりに触れると生きていることがよく判った。抜け殻のような妻の口から出る生気がこれ以上流れでないように星夫は自らの口で妻の口をふさいだ。それは映画の口づけのようになめらかなものではなく、人工呼吸のように思えてきた。生きろ、生きてくれと哀願をこめて妻の口をふさいで妻を殺そうとするようにお互いの空気を奪い合った。妻が力をこめて星夫を引きはがそうとする。こんがらがった糸がほぐれて、二人は畳につぶつぶしてようやく息を整えることができた。星夫は頭を妻の肘に載せて二の腕を舐めようとする。妻はまた動かなくなつたかと思うとこんどは、肘をすっこめて顔を傍に持ってきてまた呼吸が困難になるくらいの口づけをしてくる。口づけの後に妻は強烈なビンタを星夫のわき腹に何度も入れる。「馬鹿。馬鹿」激しく何度も罵って妻の体が一層熱くなってきた。「阿呆。阿呆」妻は何度も罵倒する。わき腹、背中、尻、ふともも星夫の体中に精いっぱいビンタを入れる。それでも妻の心に満足はやってこないようだった。やがて星夫の胸が妻の心臓の位置に乗り、妻が確かに生きていることが実感できた。妻の唾液が口の中を満たしていく。そのうちに分ち難い体を妻は、引きはがしては戻ってくる。本当に星夫の体には紅葉のように鮮やかな妻のビンタの跡が幾つも浮かび上がってきている。星夫は妻の背中に抱きついて妻の匂いを鼻に記憶させようと熱心にする。乳白色の妻の背中からは甘い匂いがして、星夫はくらくらするかと思つたら、そこにあるのは妻の背中を借りたこの家の匂いだった。妻は眠るように眼を閉じて、私の心臓の音を聞き取ろうとする。妻が私の心臓の音を聞き取り、嬉しそうな顔を見せてくれた時には私はようやく安堵することができた。これでもとに戻ることができると確信して二人は交わりながら眠りの中に落ちていった。

妻はそれから数日後のある日を境に蒲団から抜け、自らの服と共に消え去ってしまった。書きおきが私の煙草の買い置きを閉まっている棚から出てきたとき、妻らしさがにじみ出て泣きそうになるような愉快な気分になった。

書きおきにはこうつぶつてある。

「わたくしは、これまで旭日が昇るよりも前に起きて、自分と貴方の身支度をして無意味な坂道を登り、徒勞と判っている火をつける作業を何べんと繰り返してきました。そのうちにわたくしは、これを繰り返すことがわたくしのさだめであるような気がして、恐ろしくなりました。あと何べんこれを繰り返すのだろうと数えて見ると、その数字にわたくしの人生の無意味さがふつと現れてきてわたくしは何だか今すぐにでも死にたくなるよう

な思いにかられました。貴方はわたくしがそつと火の中に貴方と貴方のおじい様を呪う手紙をくべていることをご存じでしたでしょうか。わたくしは毎夜、すべてが寝静まりかえる時刻にそつと呪詛の文をつづっていました。お気づきでしたでしょうか。それを起床したあと、毎朝読み、前の晩のわたくしが如何に恐ろしいこと考えていたのだろうかと愕然とするのでした。貴方と毎朝歩くことは、わたくしにとつて苦痛ではありませんでしたが、わたくしはわたくしの持つ思想にうんざりして毎朝、これを焼きに行く思いで焚火の場所に向かつていたのでした。貴方は空ばかりをご覧になっていたので、お気づきではないと存じます。以前よりわたくしは、旅にそこがれをもっていました。いま、貴方と一緒にではない世界に対して、不安と興味でいっぱいです。ごめんなさい。妻より」

蒲団は綺麗に畳まれていて、今朝の朝食さえ居間に用意されてあった。朝から箸ですみずみまで塵をはらったように清潔な食卓であった。妻の手紙を読みながら、星夫は妻の焼いた卵焼きをほおばった。泣きたくなるような愉快な気持ちにまた訪れて、どうにもしたなかつた。

山に登る時の為に買った靴のひもを一度ぜんぶ解き、びんと張りなおしてからもう一度靴の穴それぞれに通していく。一番下の穴から出発した二本の紐はやがて出会い交差して次の穴を目指していく。そしてもう片方の靴も同じようにして、堅く紐をもう解けないように結んだ。きつく足が痛いほどにきつく。妻の靴は当然そこになかった。妻の靴が坂道の前を歩き、自分の靴が後からついていくという何度繰り返したか判らないその光景を懐かしく感じながら、星夫は玄関の隙間から入ってくる寒気に曝されていた。

何も言葉が出てこなくなつたようだ。冬の朝の見慣れた風景を見て、星夫は素直に美しい Landscape だと感じた。静けさの渡る田畑に一面雪が積もってあぜ道には子供の作つた手のひら大の小さな雪だるまが横たわっていた。山の方に向かう坂道には、雪の中から笹の葉が顔を出してその奥には鬱蒼とした竹林が続いており、竹林の向こうにはクヌギなどの広葉樹がずつと続いている。曇天の日に旭日は仔馬のように走ってきてはくれない。ぼんやりと不安が世界を覆いつくしてしまうような天気に見降ろされながら、星夫はいつもの如く坂道を登っていく。妻と連れだって十余年の歳月が流れていた。それが今日最後を迎えたのだろうか。妻と出会ってから、楽しいことも勿論あった。朝の山道を登り、焚火をするだけが夫婦人生ではないはずだ、と星夫は考えた。妻の焼いた魚の味がふつと山道に匂つたような気がする。焼き魚に妻は冷たいわき水で洗つた大根をオロシにして添えてくれた。妻の生家は蜜柑畑をしていて、焼き魚を食べた後には自慢の蜜柑を剥いてくれてわざわざ皿に載せて出してくれた。

「渋皮まで剥いて、そんなの自分でするし、そこまでしれくれるなよ」ごちそうが並んだ食卓には不釣り合いなほど電灯は暗かつた。家の外、隣の農家を営む一家の誰かが軽トラックをふかしている。ふんふんと軽トラックのエンジン音がなり、暗いからガソリンの

臭いが漏れ出ているような気がした。ばたん、ばたん、トトラックの扉を開ける音、閉める音が何度かして、お隣はこんな夜更けにどこへ行くのだろうかと疑問が生じた。妻はさきほどの星夫の言葉には反応を示さず、台所で流しを丁寧拭いている。トトラックのエンジン音が一息に大きく鳴って砂利の音が戸外でして、唸る音がこちらに近づいてくる。

「貴方はご自分では何もできないわい」そう妻が口にした時に向こうから来ていたトトラックが門扉の横を通りすぐさま障子をふっと明るくした。妻の後ろの漆喰の壁に妻の体の大きな影ができてすぐに小さくなった。星夫は心を射抜かれるような心地がした。

「貴方はご自分では何もできないわい」妻の言葉を自分でも繰り返してみる。

星夫はくすぐられるような笑いに見舞われた。そのうち本当に可笑しくなってきたと笑わずれ、腹を抱えて朝の山道にうずくまった。毛虫のように地面に這いつくばってげらげらと笑い、下卑た声を腹の中枢から漏らした。朝の空気が馬鹿みたいに澄んでいて、星夫が笑い崩れるのを冷ややかに視ている。そこには星夫の聲が聞かない。

「お前は何も知らないな。この鳥も知らないのか」

過日の夜半のことを星夫はまた思い出していた。家にあつた鳥類図鑑を持ってきて、鳥の写真を妻に見せている。妻は都会の学校で寮生活を送ったため、鳥をあまり見たことがなかった。「知らないわ」「これは」「知らないわ」とやりとりを繰り返す。妻はさして最初興味もなさそうだったのに、鮮やかな羽や鶏冠を持った外国の鳥類がでているページになると皿のようにして覗きこんでいる。こんな妻は見たことがなかった。「鳥はいいわね」妻は言う。

好きな枝に巣を作ることができるもの。イヤミのようにもとれる妻の言葉が不思議に軽くて後に残らなかった。その通りだなど星夫も言って、焚火のことを考えた。火を見ている妻は好奇心というよりは運命をみつめているようだった。己が人生の巣をここに決めてよかったのかと妻が煩悶しているのが、何も語らなくても判った。星夫はそんな妻を許した。憎めなかった。憎むのは自分の出生でしかなかった。妻はここを出てどんな冒険をするのだろうか。それを伝記にして本にくれたらまたこの家の寝どこで妻のことをおもいだすことができるのにと星夫は悔しがった。泣きたくなるような愉快な気持ちのまま何処からかやってきて、星夫にそつと耳打ちをする。「妻もお前を憎んではいないと思っよ」と。そう思いたいだけなのかもしれない。それは自分の中から出た言葉かもしれない。けれどその時に星夫はそれを他者である誰かが告げてくれたのだと思うことにした。足音を重ねる度にやがて確信する。妻は冒険に出た。新しい巣をつくるための。

俺は妻がいつ帰ってきてもいいように古い巣を守り続ける。ぎゃーとカケスが啜うように鳴いた。

焔は私に語りかけるように燃える。

「お前はあと何べんこれを繰り返すのか。」

爺さんと父親に縛られて、お前の一生は終わるのか」

そして私は焚火に砂をかける。

「何度でも繰り返そう。」

お前様たちが私に問いかけるように、世界には終わらない行事が幾つもある。

終わらない焚火に過去をくべる。焚火はがんじ搦めの因縁を燃やしていく。

俺は燃えのこったものに目を向けることにする」